

《巻頭言》 エスノグラファー・山本須美子さんに学ぶ

長 津 一 史*

Preface: An Essay in Commemoration of Professor Yamamoto Sumiko as a Distinguished Ethnographer

NAGATSU Kazufumi*

は じ め に

2021年3月、山本須美子さんが東洋大学社会学部社会文化システム学科の教授を退任する。本誌『白山人類学』の母体である白山人類学研究会は、30年強におよぶ歴史を持つ日本でも有数の人類学研究会に成長した[松本 2020]。山本さんは、2003年に東洋大学に着任して以来、昨年退任された松本誠一さん、三年前に退任された植野弘子さんとともに、白山人類学研究会の運営に携わってこられた。ここ数年は会の中心的な担い手であったが、けっして表に出ようとせず、つねに裏方にまわり、笑みをたやさずに研究会の活動を支えてこられた。2017年度から今年度までは本誌の編集委員長も務められた。研究例会や編集作業での山本さんの細やかな気遣いは、白山人類学研究会のまさに潤滑油であった。山本ゼミ所属の大学院生たちが研究会に参加してくれたおかげで、会には常にフレッシュな顔ぶれが並び、活力を維持することができた。以下では、山本さんのご退任に祝意を表し、わたしの浅学を覚悟のうえで、山本さんの研究と教育のごく一端を紹介したい。

山本さんの研究——周縁を生きる人びとのエスノグラフィ

2006年、わたしが東洋大学社会学部社会文化システム学科の教員として着任したとき、山本さんは、学科のホームページで他の学生たちとともに文字通り「顔」になっていた（しかもアップで！）。写真の人を学生だと思いこんでいたわたしは、着任時にその人が教員であることを知って驚いた。同僚になった後、その若々しさ・元気が、実際の研究・教育でもいかに発揮されていることに、さらに驚かされることになる。

山本さんは、長期休暇ごとに欧州の移民社会、とりわけ中国系移民のコミュニティを訪問

* 東洋大学社会学部 ; Department of Sociology, Toyo University, 5-28-20, Hakusan, Bunkyo, Tokyo, 112-8606 / e-mail: nagatsu@toyo.jp

してフィールド調査に従事し、学校教育や民族教育の経験と当事者にとってのその社会的・文化的意味を丹念に探っていた。調査地は、イギリス、フランス、オランダに始まり、ハンガリー、スペインにまで及んだ。ひとりの研究者が欧州の中国系移民、特に第二世代の教育経験をこれほど包括的に比較考察した例は、日本はもちろん、世界的にみても類をみないのではないか。

その成果は、「中国人であること」と「イギリス人であること」の境界に着目して、ロンドンに住む中国系第二世代のアイデンティティ形成とその動態を論じた博士論文 [山本 1998]、博士論文を研究書として洗練させた山本 [2002]、イギリス、フランス、オランダ3カ国の中国系第二世代の学校適応・不適応を比較検討した山本 [2014]、仲間と共に欧州移民社会のシティズンシップのあり方を探った山本編著 [2012]、同じく仲間とともに欧州各国の教育政策と移民社会の学校適応を比較考察した山本編著 [2017]などにまとめられている。

山本さんは、国内でも、横浜の中華街や東京・西葛西のインド人コミュニティで移民の教育実践やアイデンティティ形成に着目したフィールドワークをおこない、その成果を論文として公表している [山本 2017]。移民社会以外では、鹿児島県鹿屋市のハンセン病療養所、星塚敬愛園に通い、被差別的な社会的境遇を生きることを余儀なくされた元患者の方々の語りをライフヒストリーとして紡いでいる [山本・加藤 2008]。

山本さんの研究は、一貫して、マイノリティや社会的な弱者に寄り添いつつも、かれらがその境遇に拘わらず、いかに豊かで魅力的な人生をつくりあげているのかに関心を向けてきた。いわゆるライティングカルチャー・ショックの後、特に1990年代から2000年代にかけて、日本の文化人類学の一部は、滑稽なまでに内省的になり、フィールドや他者と対峙するのを避け、一般社会はおろか隣接学問にさえ意味が通じないような、上滑りした言葉遊びと理論化の志向を強めていたように思う。そうした時代にあっても山本さんは、フィールドや他者と徹底的につき合い、周縁を生きる人びととの対話を続け、エスノグラフィを書き続けた。

エスノグラフィに対する批判、とりわけ他者表象が持つ政治性に対する批判 [Clifford and Marcus 1986] に無自覚だったわけではない。ハンセン病回復者のライフヒストリーを描くにあたって、山本さんは次のように述べている。

声なき人の声を聞き取り、それを記録したり編集したりしながらエスノグラフィをまとめていくという行為は、ポストコロニアル理論によって指摘されてきたように、表象すること自体のもつ暴力性から逃れることはできないといえる。しかし、だからといって声を聞かなければ、ハンセン病療養所で生き抜いてきた入園者の声は永遠に誰にも届かない。[山本・加藤 2008: 19]

山本さんは、エスノグラフィに内在する宿痾と向き合いながら、それでも人類学のなすべき営為として、同時代の他者との対話をかさね、語られた声をできるだけ実直にエスノグラフィのなかに書き残そうとしてきたのである。その姿勢は、現場を歩き続けるベタなフィールドワークを唯一の研究手法とするわたしに、大きな勇気を与えてくれた。

研究の手法とアプローチ——対話・ライフヒストリー・エージェンシー

研究面で山本さんは、移民社会の学校教育とアイデンティティ形成を主なテーマとする教育人類学の分野で多くの優れた業績を残してこられた。教育人類学や欧州移民研究、華僑・華人研究の分野における山本さんに対する評価は、専門家の筆に委ねるしかない [たとえば、青山 2011; 池田 2015; 植村 2017]。ここでは、非専門家の視点から、山本さんの研究の手法とアプローチに限定してその特徴を簡潔に記す。

対話・聞き取り

山本さんの研究は、被調査者との真摯な付き合い、その付き合いを土台とする綿密な対話・聞き取りを手法面での特徴としている。ここであえて「対話・聞き取り」と記したのは、調査において山本さんが語り手と聞き手の相互作用に注意を払い、その相互作用によって生まれるリアリティをとりわけ重視しているからである [山本・加藤 2008: 16-17; 桜井 2002]。

ロンドンの中国系移民を対象とする研究[山本 2002]では、比較的若年(10代後半から20代)の中国系第二世代の31人との対話・聞き取りの結果が主要なデータとして用いられている。同研究の12年後に刊行された山本 [2014] は、16年間にわたってイギリス、フランス、オランダそれぞれの中国系第二世代約100人(世代は10代後半から60代まで幅広い)との対話・聞き取りに基づいている。被調査者のなかには、繰り返し、数度にわたりインタビューを受けた人も多数含まれている。

欧州の中国系第二世代を対象とする調査では、教育の経験を軸とするライフヒストリーに焦点がおかれている。個人の生き様をまるごと辿ろうとするインタビューにこれほど多くの人が(おそらくそれほど抵抗なく)応じているのは、山本さんが長期にわたりかれらと付き合い、かれらの人生に共感しながら対話をかさね、誠実に話を聞き続けてきたからに違いない。山本 [2014] には、次のように記されている。

[調査対象者のなかには、23年前のロンドン調査時代から付きあっている人びとも含まれていて、かれらは]「生涯の友」となっている。そして、3国における[中国系移民]第2世代へのインタビューでは、筆者が年を重ねるに従って一人ひとりのライフヒス

トリーへの共感が深くなり、自分の人生との重なりを感じながら聞き取った。こうした調査を支えてくださった多くの方々との数々の出会いは、筆者にとって何よりの財産である。[山本 2014: 335]

鹿児島県のハンセン病療養所を対象としておこなった研究では、2002年から2008年までに10回にわたって療養所を訪問し、男女29人のハンセン病回復者から話を聞いている[山本・加藤 2008]。同研究は、恋愛や結婚、出産、子育てというプライベートな領域での経験を中心に、ハンセン病回復者の生のリアリティを細やかに描き出している。そのリアリティは、語り手である回復者と、聞き手である山本さん、共著者の加藤尚子さんとの、対話を介した相互作用のなかで現れたものである。そうした相互作用は、山本さんたちが繰り返し療養所に回復者を訪ね、かれらの人生に寄り添いながら、その声に真摯に耳を傾けてきたことにより、はじめて可能になったに違いない。

なお、山本さんは、こうした地道な対話・聞き取りのデータを教育社会学等の理論を用いて分析し、鋭い理論的考察を加えてもいる。たとえば山本[2014]では、「成功の民俗理論」[Ogbu 1991]を援用して、中国系第二世代の学校教育への適応・不適応を説明している。また、文字資料についても、たとえば山本・加藤[2008]では、ハンセン病療養所の自主機関誌『始良野』(1948年創刊、2008年の調査時まで継続発行)のような一次資料を丹念に読み込み、ハンセン病回復者自身による隔離経験の表象を分析している。このように山本さんの研究が、対話・聞き取りを軸としつつも、理論・資料双方の面で複眼的なアプローチをとることにより民族誌研究としての厚みを確保していたことも付言しておきたい。

ライフヒストリーとエージェンシー

山本さんが対話・聞き取りにおいて中心においていたのが、対象とする人の生そのものと正面から向き合い、それを政治や社会のマクロな文脈に定位しつつ動態的に辿っていかうとするライフヒストリー(あるいはライフストーリー)のアプローチである。山本[2002]では、親の背景にある文化とイギリス主流社会の文化との境界で、ロンドンの中国系第二世代がいかに自らの文化的アイデンティティを構築してきたのかを、かれらのライフヒストリーを辿りながら検討している。山本[2014]では、イギリス、フランス、オランダ3カ国の中国系第二世代が、どのように教育や親との葛藤を経験してきたのかを跡づけ、その語りからかれらの文化的アイデンティティ形成のメカニズムを比較考察している。山本・加藤[2008]は、結婚や子育てというプライベートな領域に焦点をおいて、ハンセン病療養所での隔離を経験した女性たちのライフヒストリーを描いている。

ライフヒストリーを描くなかで山本さんは、対象とする周縁の人びとのエージェンシーに

とりわけ重点をおいてきた。山本・加藤 [2008: 7] によれば、エージェンシーとは、人間が世界に働きかける行為の自発性、変革性、創造性を指すための概念である。山本さんは、中国系移民やハンセン病元患者の困難や被害だけではない語りも丁寧に拾い上げ、そこに現れるエージェンシーに光をあてることに注力してきた。

たとえば、山本・加藤 [2008] では、被害実態の報告書には現れない、ハンセン病元患者たちの「産まない自己決定」の語りに彼女たちのエージェンシーを見いだす。その語りは、従来、メディア等がステレオタイプ化してきた被害の言明ではない。それは、「療養所の規則に縛られながらも、それに完全に支配されていない個人のコミュニケーション能力や戦略性、自発性、創造性」を示す語りである。山本さんは、そこに「厳しい現実の中で、さまざまな人間関係を結び、自ら判断し生き抜いてきた」元患者たちの生の軌跡、すなわちわたしたち同様に主体性を持った人間の生の軌跡を読み取ろうとしているのである [山本・加藤 2008: 241-245]。



2007年4月、八王子での新入生キャンプ終了後。松本誠一さん（手前左）、植野弘子さん（同右）、王亜新さん（上段右端）、筆者（同左端）と。



2009年3月、社会文化システム学科卒業式で祝辞を述べる山本さん。

フィールドワークがつなぐ研究と教育

既述のように山本さんは、国内においても鹿児島島のハンセン病療養所、横浜中華街、西葛西のインド人コミュニティで調査をおこなってきた。山本さんは、これらの調査の一部を社

会文化システム学科の学生たちとともにおこなった。

山本さんの現場での教育は、これまでにみた自らの研究実践、すなわち主流社会が看過してきた周縁を生きる人びとを前景化しようとする研究実践と接合されていた。そのため、学生たちに対しては、周縁の聞こえなかった声を聴かせ、主流社会のみえなかった歪みをみせ、両者のあいだに浮かび上がる問題意識を共有させる効果を持っていたに違いない。

その教育はまた、山本さん自身が実感していたフィールドワークの楽しさを、学生たちに五感を通して伝えるものでもあった。わたしは数度、山本さんのフィールド実習に同行したことがある。山本さんは、学生とともに軽やかに現場を歩き、好奇心に満ちた目で調査テーマの奥深さを語り、かれらを見守りながらも現場の人たちとの会話に自ら積極的に乗り出していた。学生たちは、フィールドワークの魅力を全身で表現する山本マジックに惹きつけられ、やがて自身がフィールドで異文化を学ぶことの面白さにはまっていったのだろう。山本ゼミは、所属学科でもっとも人気が高かった。選抜を経て山本ゼミに配属された学生たちは、所属学科でもっとも多く優れた卒業論文を積みあげてきた。そのほとんどは、学部生としてはかなりレベルの高いフィールドワークに基づいている。

山本さんの研究室には、数え切れないほどのゼミの集合写真が飾られている。そこに写る学生たちのあふれんばかりの笑顔は、かれらが確かに学ぶ喜びを手に入れていたこと、そしてなにより山本ゼミを心から愛していたことをよく伝えている。

おわりに

山本さんは、白山人類学研究会でも数々の成果を発表されている。発表のいくつかは『白山人類学』に寄稿されている [山本 2005, 2006, 2007, 2016, Yamamoto 2008]。2021 年度には、現在取り組んでおられる科研費研究プロジェクト「EU の中国系新移民の子どもにみるトランスナショナリズムに関する教育人類学的研究」に関するセミナーを、白山人類学研究会の年次フォーラムとして組織してくださる予定である。学外でも山本さんは、日本華僑華人学会の中心的メンバーとして活躍された。欧州の移民コミュニティを対象とする科研費研究プロジェクトも、過去 15 年にわたり継続して率いてこられた。大学は退任されるが、山本さんの研究人生はこれからより一層、成熟していくに違いない。後進のわたしたちに、また文化人類学を主とするアカデミア全般に、さらなる知的刺激をもたらしてくださることを期待したい。

最後に短く補足しておく。これまでの拙文ゆえに読者は、山本さんが研究・教育一筋の堅い人物であるかのような印象を抱いてしまったかもしれない。その印象は修正される必要が

ある。山本さんは、研究会の懇親会やゼミのコンパでは、白ワインのグラスを片手に豊富な知識で会話を盛り上げつつ、同席者の話には優しく耳を傾ける素敵なエンターテイナーでもある。外見に似合わずけっこうな左党ぶりをみせることもあった。数年前まで学科の文化人類学教員は、夏ごとに植野弘子さんのご自宅で「暑気払い」の会を開いていた。その会で山本さんは、ときどき頬が真っ赤になるまで痛飲しておられた。

2007年の夏、その暑気払いの帰路、地下鉄乗り換えのため、神保町駅の通路を数人で千鳥足になりながら歩いていた。そのとき、山本さんが唐突に「それじゃだめだつてー、長津さん」と嬉しそうな顔で語りかけてきたことを憶えている。何がだめだったのかは、いまに至るまで不明である。ただ、もしかするとわたしは、フィールドワークをしてもなかなか書けないんです、といったぼやきを暑気払いの場で口にしていたかもしれない。山本さんは、調査をした者の義務は書くことである、と自らを厳しく律する研究者である〔山本・加藤 2008: 19〕。ほろ酔いの山本さんのひと言は、怠惰なフィールドワーカーであるわたし向けられた優しくも厳しい叱咤激励だった——そう心に留めておくことにしたい。15年間、研究と教育双方のフィールドで、山本さんから学ぶことができたことを心から誇りに思う。

参 考 文 献

(山本さんの文献については、「山本須美子教授の略歴と研究業績」(9～14ページ)を参照されたい)

青山陽子

2011 「マスター・ナラティブとしての「被害」の語り——ハンセン病訴訟におけるストーリーの形成過程を通して」『現代社会学理論研究』5: 171-184.

池田賢市

2015 「書評 山本須美子著『EUにおける中国系移民の教育エスノグラフィ』」『教育学研究』82 (1) : 127-129.

植村清加

2017 「書評 山本須美子著『EUにおける中国系移民の教育エスノグラフィ』」『文化人類学』82 (1) : 112-115.

桜井厚

2002 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.

松本誠一

2018 「植野弘子さんと白山人類学研究会」『白山人類学』21: 1-4.

Ogbu, John U.

- 1991 Immigrant and Involuntary Minorities in Comparative Perspective. In *Minority Status and Schooling: A Comparative Study of Immigrant and Involuntary Minorities*, edited by Gibson, Margaret A. and John U. Ogbu, pp. 3-33. New York: Garland Publishing.

Clifford, James and George E. Marcus.

- 1986 *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*. Berkeley: University of California Press. (クリフォード, ジェイムズ/マーカス, ジョージ 1996『文化を書く』春日直樹・足羽與志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子訳, 紀伊國屋書店)